

ジャパン・ソサエティでの4日連続弁士公演について、  
活動弁士・澤登 翠氏の記事が活狂(かつきち)春号に掲載されました。

(3) 澤登 翠・活狂ニュース



ニューヨークで  
公演いたしました

澤登 翠

冷凍庫の中というのはこの冷たさなのだと、帽子、マフラー、手袋、コートに身を固め、表に出ているのは顔だけという格好でニューヨークの四十七丁目を歩く。その先はイースト・リバーという閑静な一角にジャパン・ソサエティがあり、二月十三日から三日間、地階のホールで日本無声アニメや活劇他の弁士をつとめさせていた

のだいのです。ジャパン・ソサエティは十九年ぶり。その時には平野共余子さん(現在大学で映画を教え、『ニューヨークのクロサワ』他優れた著書のある方)にお世話になり、今回は長澤綾さんに温かな御配慮を頂きました。才能豊かな女性ディレクターお二人のお蔭で二回目のニューヨークとなったのです。

日本のアニメーションは無声時代から沢山作られ、昨年はデジタル・ミームから「日本アニメクラシックコレクション」のDVDも出しました。日本の現代アニメは今世界の注目のですが、では無声アニメは？まずはニューヨークで

のお披露となったのです。『のらくろ』『おい等の野球』『大当りの無声日本アニメが多数海外で上映されたのは、今回が初めてではないでしょうか。二五〇人位入れるホールは連日満員。ニューヨーク・タイムスに紹介されたこともあって盛況でした。「日本アニメの線描が面白い」「不況や失業といった社会の状況をとり入れたアニメの暗いムードに惹きつけられた。憂うつなのだけれど、のんびりしたところもあって独特だ」「弁士には決まった台本はあるのか」「弁士は伝統的なものに影響されていたのか?」と質問も色々。話芸の土壌が豊かであること、舶来のフィルムを興行として上映するには「説明」がどうしても必要だった等、弁士の成立と発展の要因に言及した上で、説明台本を弁士が書く自由と、活弁に先行する伝統芸(義太夫、講談他)の影響を受け、弁士は各人独自の芸を編み出す自由はあった。弁士は伝統と

新しいもの間に立つ、その微妙なところが特徴：とこれは私の弁士についての解釈をまじえてお話ししました。

この「古くからあるものと新しいもの間に立つて両方から糧を得ていた弁士」に興味を持って下さり、「哲学的だ」と言って下さったのは、ニューヨーク在住の哲学教授マーク・ラリモア氏でした。本当にバラエティ豊かなお客様で、会場は和やか、皆さんとても愉しんで下さいました。日本語の活弁が英語字幕でスツと出てくる、ライブ感覚で画面に出てくるのには、操作担当の方の奮闘があつてカンゲキでした。長澤さん始め皆様に感謝いたします。

同行して下さったマツダ映画社の松田さん、公演のアレンジをして下さったデジタル・ミームのグリーンバーグ氏にも御礼申し上げます。また是非行きたいです。



媒体データ 媒体名：活狂(かつきち) 掲載号：2008年春号 発行：無声映画鑑賞会

クラシックフィルム上映会、DVD 情報はこちらから  
[www.digital-meme.com](http://www.digital-meme.com)

DIGITAL  
MEME

©株式会社デジタル・ミーム